

検診と自己発見乳癌の間にみられる乳がんの特性：日本乳癌登録より

岩本 高行（岡山大学病院）

乳がん検診の目的は乳がん死亡率を改善させることであるが、近年、乳がん検診の効果が限定的であるという報告もある。我々は今回検診と自己発見乳がんの生物学的特徴が異なることがその原因の一つではないかと考えた。そこで、日本乳がん登録（JBCR）データを用いて、2004年1月1日から2011年12月31日までに診断された患者を対象に検診と自己発見乳がんの臨床病理学的相違について検討を行った。

検診発見は全乳がんの31.8%（65,358症例/205,544症例）であった。検診発見乳がんのうちでも無症状のものは、自己発見のものよりも臨床的に予後良好となる特徴を有するものが有意に多かった（ductal carcinoma in situ [DCIS]：19.8% vs 4.1%、リンパ節転移陰性：77.0% vs 61.6%、エストロゲン受容体[ER]陽性：82.0% vs 72.9%）。検診発見の乳がんの割合は2004年の21.7%から2011年には37.1%に増加した。また、同期間内に発見された検診発見の乳がんのうちDCISは41.5%から66.0%に、ER陽性乳がんは23.2%から39.7%に増加した。

この検討では一般的に低リスクとされるDCIS、ER陽性 およびTNM分類による早期乳がんが検診発見乳がんが多いことが明らかになった。このことは現在の乳がん検診が乳がん予後に与える効果が限定されてしまうことにつながると推察される。今後、現在の乳がん検診プログラムで発見される乳がんの特性を踏まえた上で、新たな乳がん検診プログラムの構築を目指すことで、乳がん死亡率の改善を目指すことが必要である。

Fig. 2 Proportion of breast cancers types by mode of detection.

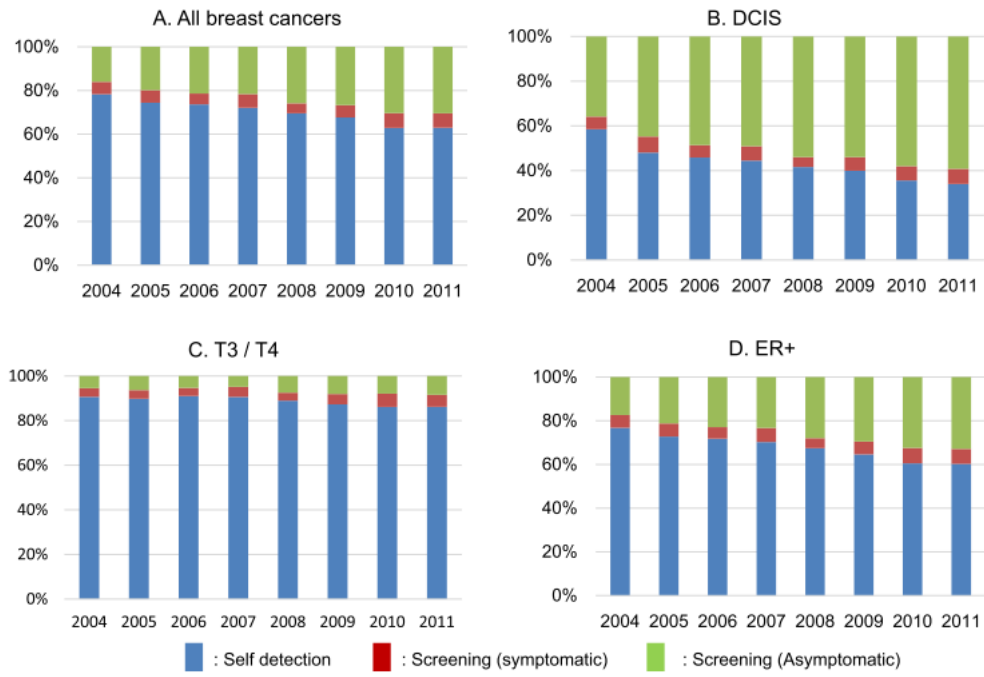


Fig. 2 Proportion of breast cancers types by mode of detection.

